

伊達家・仙台藩関係略年表

| 時代 | 西暦 | 年号 | 伊達家・仙台藩などのできごと | 国内のできごと | |
|-----------|--------------------|-------------------|----------------------------|--|------------------------------|
| 中世 | 南北朝 | | | 1333：鎌倉幕府滅亡 1338：足利尊氏、征夷大将軍となる 1392：南北朝の合一 | |
| | | 戦国 | 1536 天文5 | 伊達種宗、『塵芥集』を制定する | 1467：応仁の乱 1543：種子島に鉄砲が伝わる |
| | | | 1565 永禄8 | 輝宗、「国分」で馬を購入させる | |
| 1567 永禄10 | 政宗、輝宗の長子として米沢城に生れる | | 1573：織田信長、將軍義昭を追う(室町幕府の滅亡) | | |
| 近世 | 安土桃山 | 1577 天正5 | 伊達晴宗の五男、盛重が国分氏に入嗣する | | |
| | | 1590 天正18 | 政宗、岩出山城入城 | | |
| | | 1596 慶長元 | 国分氏滅亡 | | |
| 江戸世 | 江 | 1600 慶長5 | 仙台城の縄張りを行う | 1600：関ヶ原の戦いで徳川家康、石田三成を破る | |
| | | 1603 慶長8 | 仙台城ほぼ完成する | 1603：家康、征夷大将軍となる(江戸幕府を開く) | |
| | | 1607 慶長12 | 大崎八幡宮・陸奥国分寺薬師堂の造営なる | 1616：家康死去 | |
| | | 1627 寛永4 | 若林城の造営を許される | | |
| | | 1635 寛永12 | 保春院建立される | | |
| | | 1636 寛永13 | 政宗死去、忠宗二代藩主となる | | |
| | | 1638 寛永15 | 仙台城二の丸造営始まる、若林城解体 | 1644：幕府、諸藩に国絵図の作成を命じる | |
| 近代 | 明治 | 万治年間(1658~1660)以前 | 御仮屋(別荘)を造営する | | |
| | | 1692 元禄5 | 別荘(小泉屋敷)を造営する | 1783：浅間山大噴火、天明の大飢饉始まる | |
| | | 1836 天保7 | この年大飢饉、死者多数出る | 1867：大政奉還 | |
| | | 1877 明治10 | 河原町大火、小泉屋敷の初蔵焼失 | | |
| | | 1879 明治12 | 宮城集治監(宮城刑務所の前身)を建設 | | |
| 1900 明治33 | 伊達家、農園を設立し「養種園」と命名 | | | | |



▲若林城跡の航空写真(東から西を望む宮城刑務所)
木立の繁るところが土塁、その周りに堀がめぐっています



若林城跡と養種園遺跡

—発掘された中世・近世の遺跡—

仙台市教育委員会

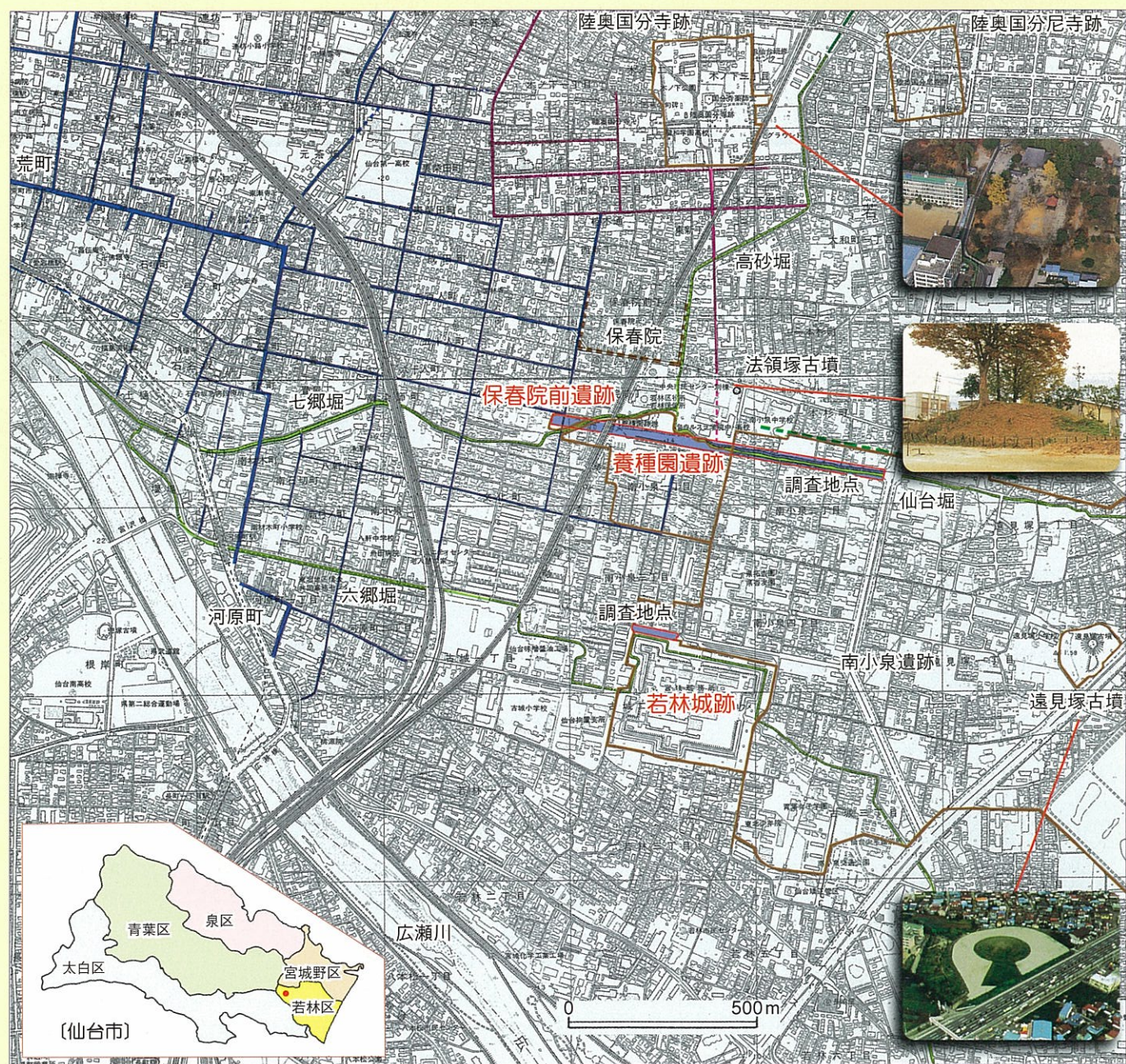
発行 仙台市教育委員会文化財課
仙台市青葉区国分町三丁目7-1
TEL/022-214-8893
発行日 平成13年12月
印刷 (株)共新精版印刷



はじめに

広瀬川北岸の若林区南小泉・古城地区には各時代にわたって数多くの遺跡がみられます。このことは広瀬川により育まれた肥沃な土地を基盤として古くから多くの人々が活動してきた証といえましょう。南小泉遺跡の古墳時代から平安時代の大集落、仙台平野随一の大型前方後円墳である遠見塚古墳や仙台では最大規模の横穴式石室をもつ法領塚古墳、律令政府により造営された最北の官寺である陸奥国分寺・同尼寺など各時代を代表する貴重な遺跡がまとってみられ、遺跡の宝庫でもあります。

平成3年から開始した都市計画街路〔南小泉茂庭線・南材木町古城線〕工事に伴う発掘調査は、南小泉遺跡・養種園遺跡・保春院前遺跡・若林城跡の4遺跡で実施し、縄文時代から江戸時代へと連続と続く人々の生活の跡を発見しました。中でも陸奥国分寺に関わる奈良時代の集落跡、中世の墓跡群、戦国時代の屋敷跡、江戸時代の伊達家に関わる屋敷跡など数多くの新しい発見もありました。ここでは中世から近世の時代に的をしぼり、この地域の歴史の一端を紹介します。



▲若林城跡周辺地域



若林城跡

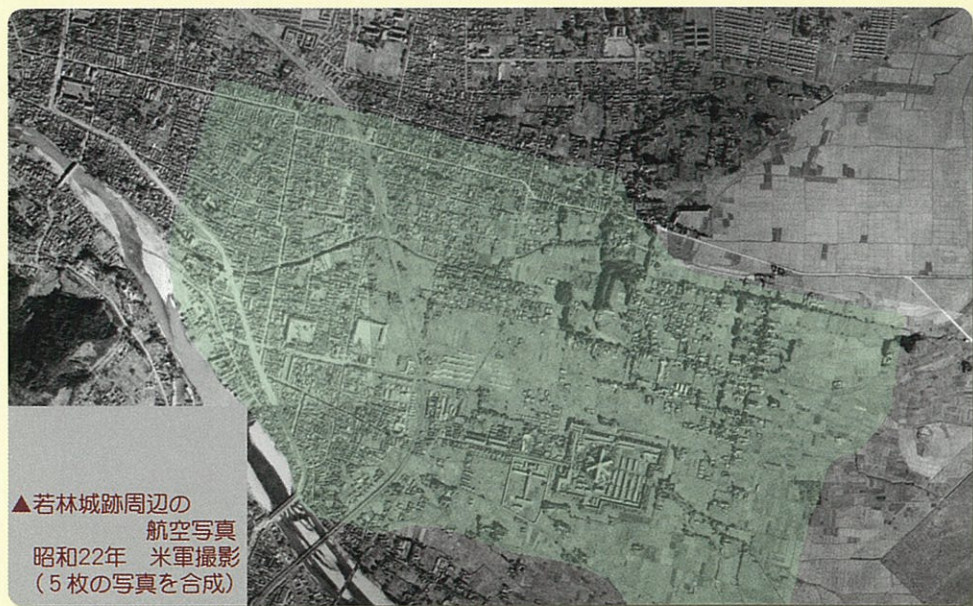
伊達政宗が慶長5年(1600)に仙台城の縄張りを行ってから約30年後、この地に若林城を造営します。政宗が晩年を過ごした城として知られていますが、城自体は造営から政宗死去に伴う城解体まで約10年という極めて短い存続期間でした。城は堀と土塁が四方に巡る東西400m、南北320mと大きな規模を誇るものです。幅広の堀や高い土塁は随所に張り出しをもち、入り口にはL字形の土塁柵形が築かれています。城廃絶後は「御薬園」(藩営の薬草栽培等の施設)として使われていたこともありました。

明治12年(1879)、城跡に宮城集治監(宮城刑務所の前身)が建設され現在にいたっています。土塁上には堀とともに木立が屋敷林のように茂り、堀は埋め戻されていますが、鳥瞰すると往時の姿が偲ばれます。

城下の町割り

若林城北側に城下の町並みが広がります。左図の太線で囲ったものは上の絵図の町割りを重ね合わせたものですが、大きな変化もなく江戸時代の町並みが現在までよく残されていることがわかります。この地域をみると四角形の連なりが数多く見られます。さらに、細かく見ると赤い線で示した陸奥国分寺薬師堂周辺の町割りとそれと方向を異にする青の線で示した町割りの二種が見て取れます。ともに城下の町割りですが、赤の範囲は薬師堂造営時に造り出された町割りと思われます。城西手には広瀬橋付近から鉤型に曲がり北進する主要幹線道(河原町一荒町)が仙台北部中心部へ続いています。

城下絵図には薬師堂と若林城を結ぶ線の西側に町割りが描かれ、東側は畑地のみが描かれていますが、現在でも東側は遠見塚古墳付近まで北側は緑で示した仙台堀付近まで若林城下の町割りと考えられる区割りがみられます。これは城廃絶に伴い東側の町並みがなくなった後、町割りの道のみが残ったものと思われます。



▲若林城跡周辺の航空写真
昭和22年 米軍撮影
(5枚の写真を合成)

若林城を中心とした町割りが碁盤目状に東西に広がっているようすがわかります
うす緑色の範囲が若林城下町(推定)

城内で2度の調査が行われ建物跡や瓦・陶器が発見されていますが、小規模な調査のため詳しいことは明らかではありません。

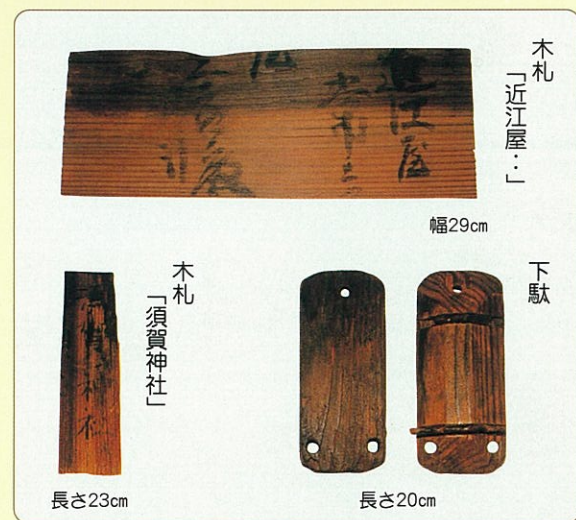
今回、堀北辺西側で東西に延びる堀を105m分、東側で南に折れる張り出しの屈曲部を確認しました。堀自体が極めて大きなものであるため堀幅や深さを知ることが出来ませんでした。江戸時代終わり頃の木製品(墨書された木札・膳・下駄・桶・建築材など)が出土しています。



▲北辺中央部のようす
堀はゆるやかに右側(南)へ落ちています



▲北辺張り出し東側のようす
堀はここで左側(城内方向)へ曲がります



▲出土した木製品



▲朝鮮ウメ(臥龍梅・国指定天然記念物)
伊達政宗が朝鮮から持ち帰ったと伝えられています

若林城の縄張り

国立歴史民俗博物館 助教授 千田 嘉博

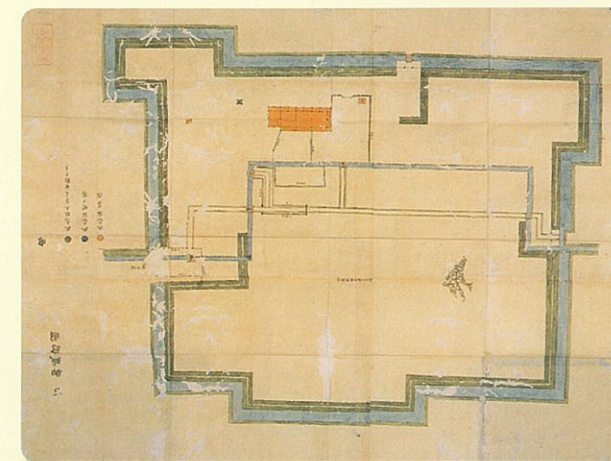
若林城は堀と土塁で守った平城で、現在も土塁がよく残る。基本的に石垣を使用しなかったが、たたき締めた土塁は高さもかたちも整っていて、中世城郭の土塁とは明らかに異なった。若林城のプランはひじょうに技巧的で、要所に張り出しを設けていた。張り出しは敵の側面をねらう防射・横矢のためであった。張り出しから城壁に近づいた敵の側面に鉄砲や矢を放つことで、城の守りを一層強化したのであった。若林城の複雑な平面形は緻密な設計の表れであり、近世初頭の城郭技術の到達点を示している。

若林城は周囲の土塁がひじょうに高いので、城内にいたのでは防戦はできなかった。土塁の上で防御するために、おそらく土塁の上に塀をめくらしていたであろう。土塁の幅は塁線隅でも現状では広くなっておらず、櫓台と指摘できるところはない。しかし『東奥老士夜話』によれば南東隅に隅櫓があったという。櫓を建ててもよい場所はほかにもありそうだが、一棟しか建てなかったのは政宗の「屋敷」としての性格からだろうか。

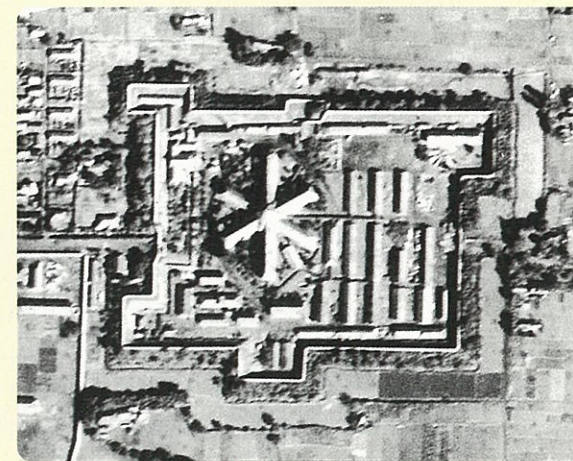
出入り口は東・北・西の三方にあった。いずれも張り出しからの横矢で守られ、防御は厳重であった。さらに入入り口は土塁をL形に曲げた内柵形にしていた。内柵形は仙台城とも共通した近世城郭の典型的な出入り口であった。3つの出入り口のうち、西出入り口の内柵形は今日もひじょうによく残っている。

城内は御殿の建つ中心的な空間と空地にしておいた副次的な空間に分かれていた。絵図に見える城内を東西に流れる水路がもともとの空間区分を反映した可能性がある。そうすると伊達政宗の屋敷は城内南側を中心に建っていたことになる。南側の塁線にだけ出入り口がないことは、こうした推測を補強する。

江戸時代の若林城を描いた絵図には「仙台下絵図」・「古御城絵図」や『御修覆帳』所収図などがある。内部の建物の有無に違いがあるが、平面プランはほぼ同じであった。絵図の描く平面プランはおおむね正確だが、なぜか南西隅の張り出しを描かなかった。航空写真と比較すれば一目瞭然であるが、実際は南西隅部は西側に城壁全体が大きく張り出して、出入り口に強力な横矢を掛けていた。おそらく最初の測量に誤りがあり、その後は元図を写して図化したためにどの絵図も同じ誤りを繰り返したと考えられる。それとも何か意図的に隠さなければいけないことがあったのだろうか。ほかの部分が正確なだけに謎が残る。



▲古御城絵図 宮城県図書館所蔵
建物一棟と右下に朝鮮ウメ(臥龍梅)が描かれています
写真協力: (株)ユーメディア



▲昭和22年当時の若林城跡(宮城刑務所)
(1947年)

養種園遺跡

若林区役所の南側、養種園跡地を中心に広がりを見せる遺跡です。弥生時代から近世にいたる遺構や遺物が数多く発見されています。ここでは中世の墓跡群・道路跡・屋敷跡、室町時代後半の戦国期の屋敷跡、江戸時代の屋敷堀・池跡について説明します。

【中世】（鎌倉時代から室町時代前半期頃）

墓跡は70基程あり庶民の墓と考えられます。径30m程の範囲の中に密集して墓地が形づくられています。墓穴は1～1.5m程の四角形のもので丸いものはありません。納棺をしないで直接穴に埋葬しています。副葬品はほとんどありません。墓は列状に並ぶものや重なり合うものもみられ、特定の区域に長期間にわたり墓がつくられてきたことがわかります。これだけの規模をもつ墓地の発見は県内でも少なく、庶民の葬送を知る貴重なものです。

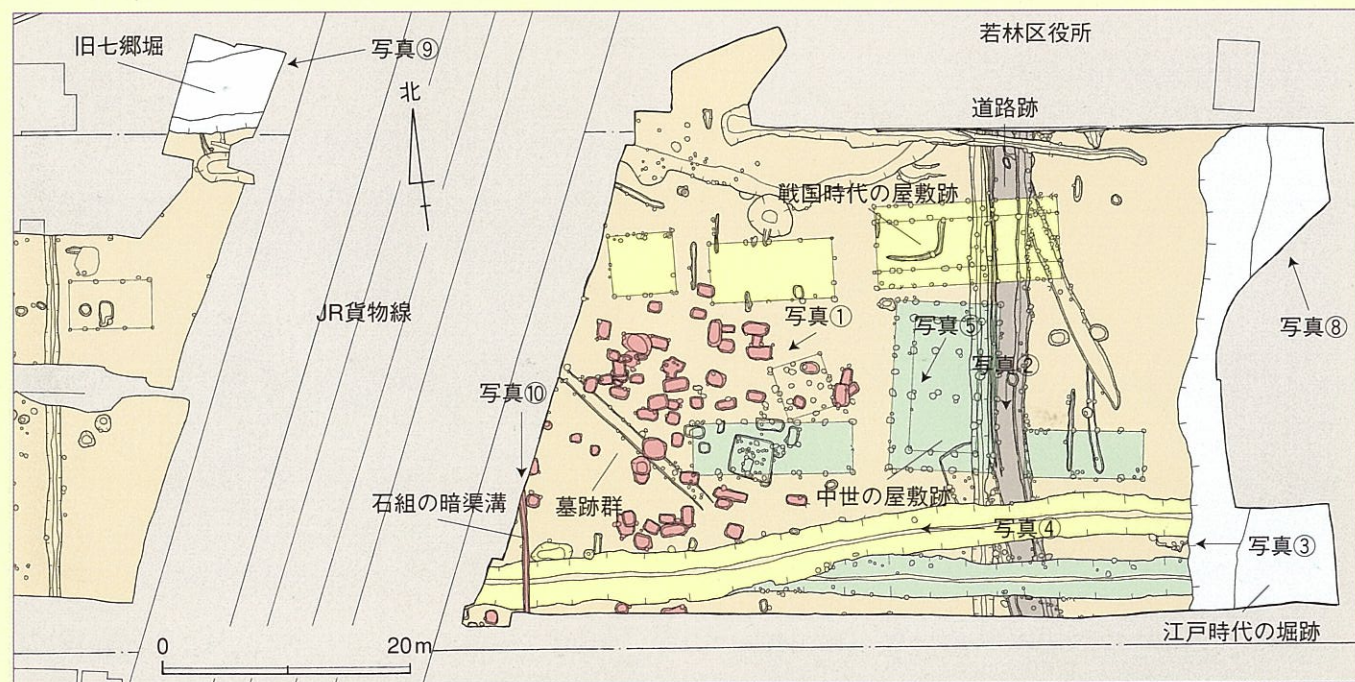


▲写真① 密集する墓跡
四角の穴が墓、重なり合うものも見られます



▲写真② 南北に延びる道路跡
ゆるく曲がる2本の溝の内側が道路面

道路跡は両脇に側溝をもつ道幅2m程のものです。ゆるく曲がりながら南北方向に延びています。屋敷造営時に壊され廃絶しています。墓地と同じ時期のものと思われる。



▲養種園遺跡西側調査図

屋敷跡は母屋となる大きな建物を中心に数棟の付属建物と区画の堀で構成されています。母屋は4面に庇をもつ14×9m程の南北に長い大きな建物です。火災で焼失しています。付属建物は東西で2棟確認しています。間取りから馬屋のような建物と思われます。堀は幅3m、深さ1m程のやや浅めの空堀です。墓地を壊して屋敷が造られ墓よりも新しいことがわかります。出土品が少なく詳しいことがわかりませんが大規模な建物からみても有力者層の屋敷と思われます。



▲写真③ 屋敷を区画する堀跡
左側が中世、右側が戦国時代の堀

【戦国時代】（室町時代の後半期頃）

屋敷跡は南と北の2面に庇をもつ15×6m程の東西に長い建物を中心に小建物群と堀で構成されています。堀は幅3m、深さ1.7m程の壁の傾斜がきつく立つ防御性に富んだ水堀です。堀からは鉄カスなど鉄生産に関するものや中国産の磁器や陶器が出土しています。有力者層（武士階層）の屋敷と考えられます。



▲写真④ V字状に掘られた戦国時代の堀跡
黄色のまだらな土で埋め戻されています

また、屋敷東側には塀などで囲まれた小建物や棟が連なる建物群がみられ、さらに鍛冶炉や墓跡なども見つかっており、町並の存在が想定されます。当時の仙台は国分氏の領地で陸奥国分寺門前には「国分日町」という市町があり、馬市などが開かれていたと伝えられています。この地は陸奥国分寺南方1km程に位置することからも、江戸時代初め頃まで存在していた国分日町周辺を知る貴重な発見と考えられます。



▲写真⑤ 建物跡の柱穴
中央に15cm程の柱の痕がみられます
火災にあっています



▲復元された町屋（福井県一乗谷朝倉氏の城下）
このような町並みが見ついていたのでしょうか



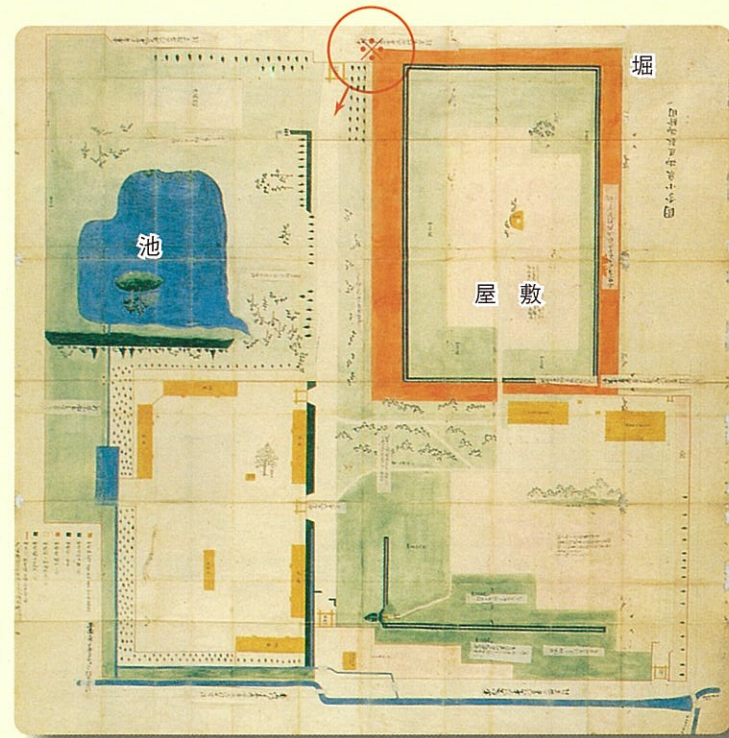
▲写真⑥ 鍛冶炉跡
熱で中央が赤く堅くなっています

【江戸時代】

屋敷堀は遺跡東側と西側の2ヶ所で発見しています。東側の堀は国分小泉屋敷と呼ばれる伊達家別荘（四代藩主綱村の造営）の北西部分の堀と思われます。極めて大きな堀で西側の堀幅20m、深さ3mを測ります。壁もきつく立ち上がり堂々とした堀跡です。なお、絵図左側に描かれた池跡も以前の調査で確認しており東西115m・南北57mを測る大きなものです。

西側の堀は西辺と北辺の一部を発見しました。この堀も幅18m以上で深さ3mを測る大きなものです。伊達家の家紋である豎三引両が描かれた漆器や雪持笹文軒平瓦が出土しています。別荘より古いものと思われる、御飯屋（二代藩主忠宗の別荘）に係る堀と考えられます。

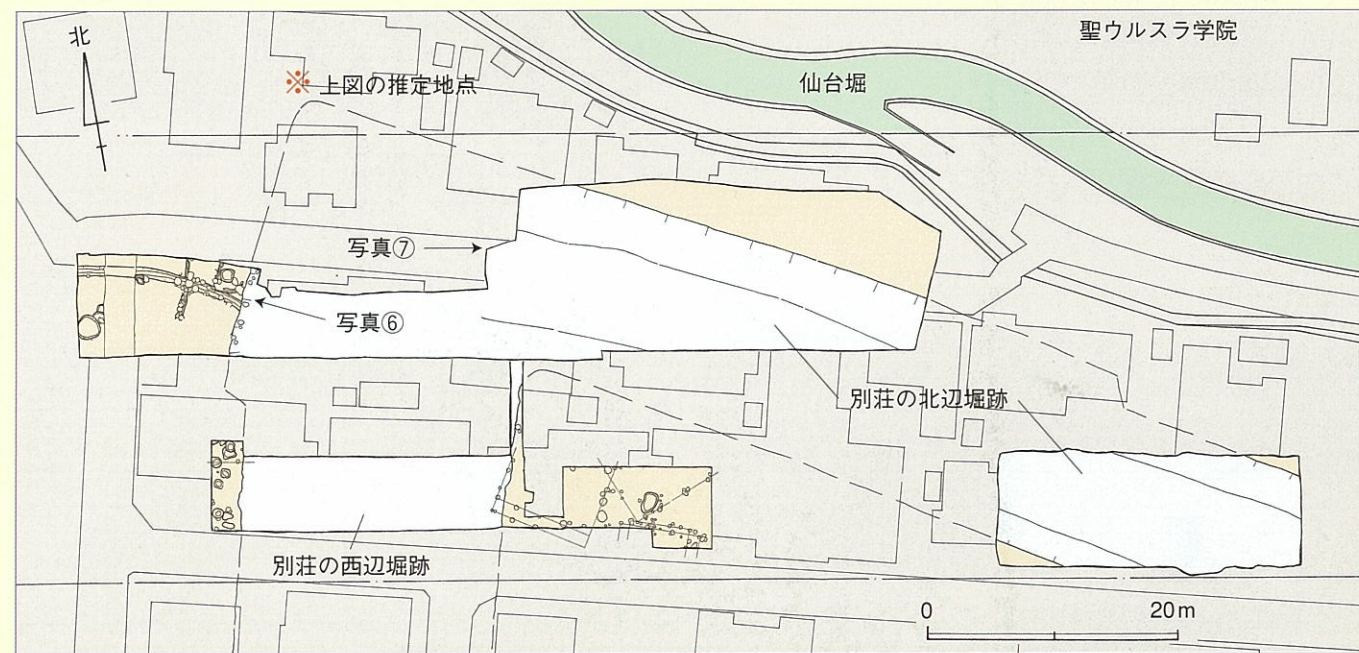
初代藩主政宗による若林城の造営と城下町の形成にはじまり、二代藩主忠宗による御飯屋の造営、四代藩主綱村による別荘の造営、明治期に入り養種園の開設と、この地域は江戸時代初めから明治時代にまで至る長い間、この地は仙台藩・伊達家と関わる歴史変遷がみられます。



▲国分小泉御屋敷御絵図 文政9年(1826) 宮城県図書館所蔵



▲写真⑦ 別荘の北辺堀跡のようす 土砂で埋め戻されています



▲養種園遺跡東側調査図



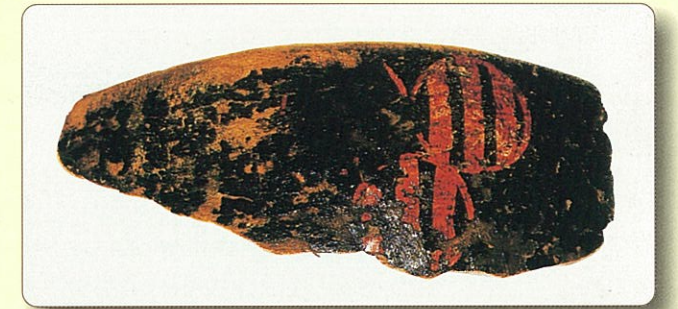
▲写真⑧ 江戸時代の堀跡のようす 御飯屋の堀と思われます 別荘造営のためか埋め戻されています



▲堀底から出土した漆器椀 縁は壊れていますが粘土にまもられ腐らずに出土しました



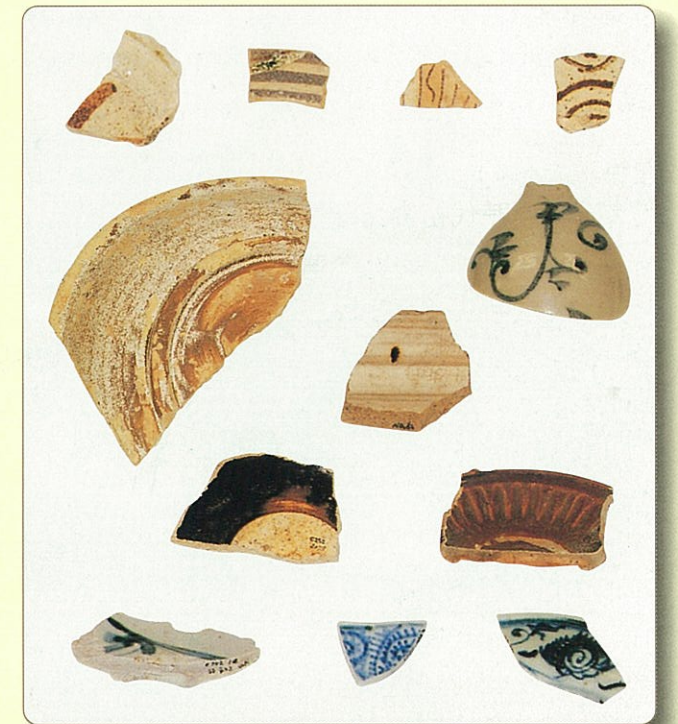
▲雪持笹文軒平瓦 仙台城跡で似た瓦が出土しています



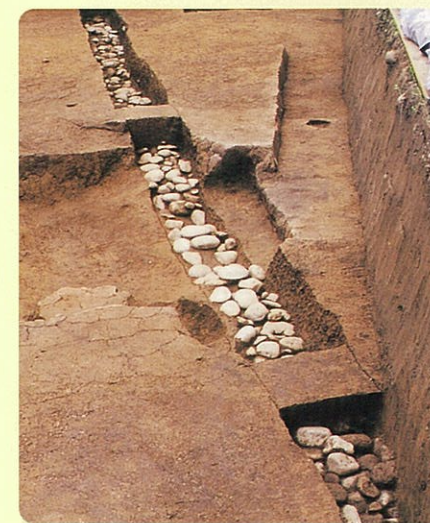
▲漆器の大鉢 三引両文が逆三角形に3ヶ描かれています



▲写真⑨ 旧七郷堀のようす 河原石にまじり陶磁器や石臼が出土しています



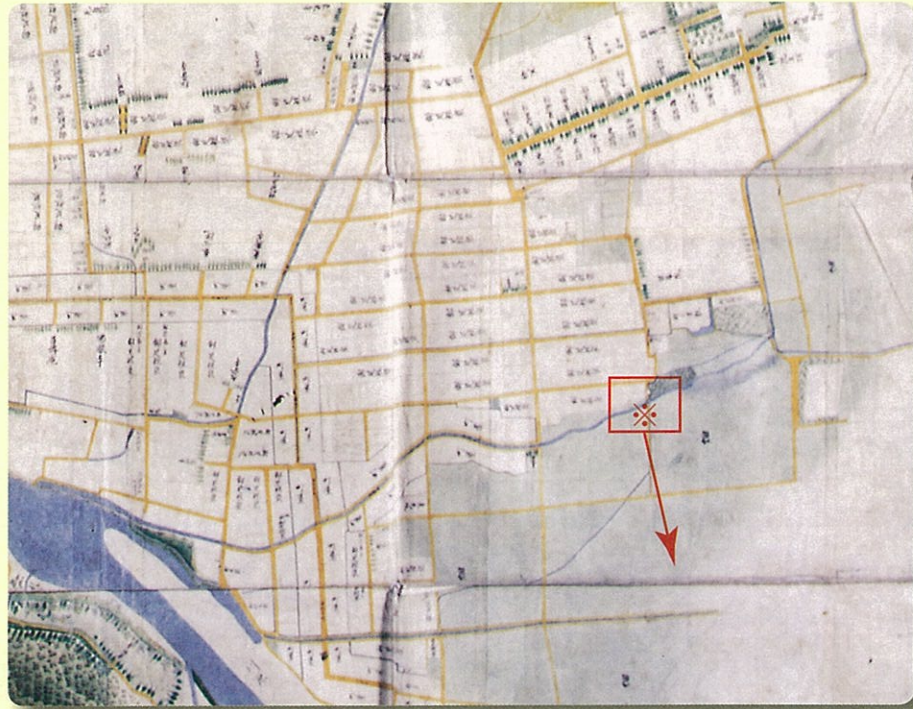
▲堀底から出土した陶磁器 当時高級品であった東海地方の陶器（織部・志野）や中国産の磁器が出土しています



▲写真⑩ 石組の暗渠溝 河原石を組合せて暗渠にしています

保春院前遺跡

若林区役所の西側、保春院前丁・六十人町に広がる新たに発見された遺跡です。養種園遺跡とは七郷堀を挟む場所にあり一連の遺跡です。奈良時代から江戸時代にかけての様々なものが見つかりました。ここでは中世のゴミ捨て穴、江戸時代の地下室・七郷堀について説明します。



仙台城下絵図(その2)
推定 天和2年(1682)
宮城県図書館所蔵
城下絵図の東南部分
印部分が調査区周辺部

青い線が七郷堀、堀北西に足軽衆の屋敷群が並び北東には保春院・下屋敷、南側から東にかけて畑が描かれている



▲写真① 調査区東側のように手前の凹面が旧七郷堀



▲保春院前遺跡調査図

【中世】(鎌倉時代から室町時代前半期頃)

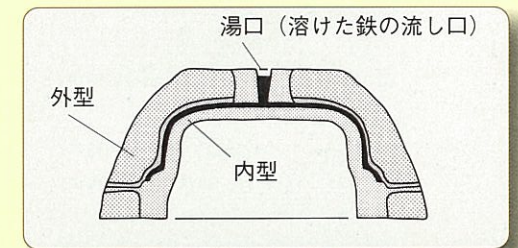
ゴミ捨て穴、これは不用となったものを棄てた穴ですが、当時の生活を知る上で貴重な資料が含まれていることがあります。今回この穴から土器(瓦質の搗鉢)とともに鉄鍋と考えられる鋳型の外型が出土しました。この外型は壊して製品を取り出すため残りにくいものですが、口径30cm・深さ10cm程の大きさの型であることがわかりました。東北地方においても戦国～安土桃山時代の鋳型の出土例は少なく貴重な発見となりました。



▲鋳型の外側(逆さで撮影)



▲写真② 鋳型が出土したゴミ捨て穴
鋳型の破片が散乱しています



▲鋳型の模式図

【江戸時代】

地下室は部屋が3室連なるL字型のもので、深さは現地表面から約2.5mあります。中央の部屋は10㎡程の広さをもち、床には柱穴がみられ穴底に沈下防止の石が据えられていました。この地下室も最後にはゴミ捨て穴として使用され大量の日常雑器が棄てられていました。江戸時代終わり頃のものと思われる。



▲写真③ 地下室のようす
壁は砂地でもろく板壁などでささえていたと思われる

七郷堀は現在も調査区南側を流っていますが、古い時期の七郷堀を発見しています。堀の流れは現在も大きな変化もなく東流していますが、部分的な拡大や改修は頻繁に行われていたようです。左上の絵図をみると道となる黄色の線の東側に幅広の部分がみられます。調査でも北側に張り出した堀を確認しており船着場のような施設と思われる。調査では全体を確認することは出来ませんでした。染布さらしや農業用水にとどまらない、水運も可能な規模を持っています。



▲出土した陶器の碗と皿
福島県の相馬焼が数多く出土しました